

## 保育者志望学生の絵本体験に関する研究

### A Study about Picture book Experience in Childhood for students of Nursery School and Kindergarten Teachers

佐野友恵\*

SANO, Tomoe\*

#### 1. 研究目的

近年、絵本をはじめとする子どもたちの読書活動の重要性が叫ばれている。1999（平成11）年4月に「子どもの未来を考える議員連盟」が結成され、2000（平成12）年を「子ども読書年」とする決議がなされた。そして2001（平成13）年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」<sup>1</sup>が制定され、子どもの読書活動推進のために必要な国および地方自治体などの責務が定められた。

国立青少年教育振興機構による「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究（2013）」<sup>2</sup>では、就学前から中学時代までに読書活動が多い高校生・中学生ほど、「未来志向」「社会性」「自己肯定」「意欲・関心」「文化的作法・教養」「市民性」「論理的思考」のすべてにおいて、現在の意識・能力が高いことが指摘されている。とくに就学前から小学校低学年までの絵本体験<sup>3</sup>が現在の社会性や文化的作法・教養との関係が強いという結果が示されている。

また、幼少期に読んだ「昔話」「絵本」の内容が成長に与える影響について研究した安達（1984）<sup>4</sup>や、学生が自らの子ども期の絵本体験を振り返り、絵本から思い浮かぶ情景、思い出に残っている絵本等を明らかにした郷木等（2006）<sup>5</sup>、藤井等（2008）<sup>6</sup>にみられるように、幼少期の絵本体験の重要性を大人になってから振り返ることにより明らかにしようと試みる研究も多くみられる<sup>7</sup>。このような先行研究からも、絵本、特に幼少期の絵本体験が人間の成長に様々な影響を及ぼしていることは明らかであろう。

幼児期に子どもが絵本を読んでもらう機会が多い場所としては、家庭、保育・幼児教育施設、図書館などが挙げられる。家庭の蔵書数、家庭における絵本の読み聞かせの頻度等は保護者によって差が生じる。また図書館の利用頻度もとくに幼少期においては保護者に左右されるものである。

一方で幼稚園、保育所、認定こども園といった保育・教育施設においては、相当数の絵本をはじめとする児童文化財が用意されており、施設により多少の差はあるものの日常的に保育者による絵本の読み聞かせが行われている。また子どもが本棚から自分で好きな絵本を手に取り自由に

楽しむ機会も多い。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領においても、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである「言葉による伝えあい」の項目として、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」と表現され、絵本は保育の中でも重要な教材の一つに位置付けられている。そのため、保育者には子どもの成長に適した絵本、より質の高い絵本を選ぶ選書の知識や感性はもちろんのこと、子どもが絵本を好きになる環境、絵本を手に取りたくなる環境を構成する技術も求められる。

先述した通り、先行研究において指摘されている幼少期の絵本体験が現在に与える影響を考える時、未来を担う子どもたちの絵本体験の量および質を左右する保育者にはより高度な絵本に関する知識や技術が求められる。そこで本研究では、保育者志望の学生を対象に実施した調査を通して、幼少期の絵本体験が、絵本に関する知識・技術に関する自信の獲得にいかなる影響を与えているのか、そして、学生の記憶に残っている絵本とはどのようなものであるのかについて明らかにする。これらの点を明らかにすることにより、今後の保育者養成における絵本に関する教育の方向性に何らかの示唆を与えることができると考える。

#### 2. 調査概要

##### (1) 調査概要

調査対象：私立M大学在學生（2～4年次生）

私立M大学短期大学部在學生（1.2年次生）

実施期間：2015年7月

調査方法：質問紙調査法

・無記名式

・マークシートおよび記述式の併用

有効回答：553件

##### (2) 調査内容

属性の他、「幼少期の絵本体験」「これまでの読書傾向」

\* 武庫川女子大学（Mukogawa Women's University）

「現在の絵本体験」「絵本に関する技術について」「現在の絵本に関する意識」について4件法で質問をおこない、あわせて「記憶に残っている絵本」「養成校入学後の学びを通して絵本に対する意識・認識が変化した点」「親と保育者の読み聞かせの相違点」について自由記述欄を設けた<sup>8</sup>。

### (3) 分析方法

肯定（そう思う）、否定（そう思わない）を説明変数として、各項目についてクロス集計表を作成し、カイ二乗検定をおこなった。統計ソフトはSPSS ver.19を使用した。

## 3. 結果と考察

### (1) 絵本に対する意識や経験

現在の絵本に対する意識に関する質問項目としては「絵本を読むことが好きである」「絵本に関する授業が好きだ」「書店・図書館に行く絵本のコーナーにも足を運ぶ」「幼少期に読んだ絵本を再度読んでみたいと思う」「新しい絵本・これまで読んだことのない絵本を読んでみたいと思う」「絵本を上手に読めるようになりたい」「幼少期の絵本体験は現在の自分に影響を及ぼしている」「保育者になったらクラスの子どもに沢山絵本を読んであげたい」「母親になったら自分の子どもに沢山絵本を読んであげたい」等が挙げられる。

表1に示した通り、保育者志望の学生は、絵本に関して積極的に関わりたい、学びたいという気持ちを持っていることが確認された。また、ほぼ全員が将来、保育者や母親となった際に子どもに絵本を沢山読んであげたいと考えている。このように、保育者志望学生の大半は、絵本に対する意識が肯定的である。

表1. 現在の絵本に対する意識

質問	選択肢	%	人数
現在、絵本を読むことが好きだ。	そう思う	49.4%	272
	ややそう思う	40.7%	224
	あまりそう思わない	8.5%	47
	そう思わない	1.5%	8
絵本に関する授業内容が好きだ。	そう思う	48.0%	263
	ややそう思う	43.4%	238
	あまりそう思わない	7.8%	43
	そう思わない	0.7%	4
書店・図書館へ行く、絵本のコーナーにも足を運ぶ。	そう思う	40.5%	223
	ややそう思う	37.7%	208
	あまりそう思わない	17.8%	98
	そう思わない	4.0%	22

新しい絵本・これまで読んだことのない絵本を読みたいと思う。	そう思う	75.9%	418
	ややそう思う	21.6%	119
	あまりそう思わない	2.2%	12
	そう思わない	0.4%	2
絵本を上手に読めるようになりたいと思う。	そう思う	87.3%	481
	ややそう思う	12.2%	67
	あまりそう思わない	0.4%	2
	そう思わない	0.2%	1
保育者になったらクラスの子どもに沢山絵本を読んであげたい。	そう思う	82.9%	455
	ややそう思う	16.4%	90
	あまりそう思わない	0.7%	4
	そう思わない	0.0%	0
母親になったら自分の子どもに沢山絵本を読んであげたい。	そう思う	88.9%	490
	ややそう思う	10.7%	59
	あまりそう思わない	0.4%	2
	そう思わない	0.0%	0

次に、絵本に関する知識や技術についての自信の有無を問う設問についてみていく。

自信があると答えた割合の高い項目は「絵をしっかりと見せながら読むことができる」「子どもが聞き取りやすい速さで読むことができる」「子どもが見やすいように絵本を持ち、頁をめくることができる」等である。

いずれも絵本の読み聞かせをする際に必要となる基本的な技術であるが、子どもたちの反応などに左右されず、自分でコントロールできる類の技術であることから、大学での授業や学外実習等である程度の経験を積むことにより自信を持つことができるようになったものと考えられる。

表2. 自信のある絵本に関する知識・技術

質問	選択肢	%	人数
絵をしっかりと見せながら読むことができる。	そう思う	17.2%	95
	ややそう思う	63.2%	348
	あまりそう思わない	19.2%	106
	そう思わない	0.4%	2
子どもがききとりやすい速さで読むことができる。	そう思う	12.7%	70
	ややそう思う	66.2%	365
	あまりそう思わない	20.0%	110
	そう思わない	1.1%	6

子どもが見やすいように絵本を持ち、ページをめくることができる。	そう思う	12.0%	66
	ややそう思う	61.0%	336
	あまりそう思わない	25.6%	141
	そう思わない	1.5%	8

一方で、自信がないと答えた割合の高い項目もある。大別すると、絵本に関する知識と、絵本の読み聞かせに関する技術に分けられる。

絵本に関する知識を問う「多くの絵本を知っている」「子どもの発達にあった絵本を選ぶことができる」の設問に対しては、半数近くの学生が否定的な回答であった。毎年多くの絵本が出版されていることから「多くの絵本を知っている」という実感が持ちにくいものと推察される。また、幼稚園・保育所などに通う子どもたちだけをとっていても0歳から6歳までの多様な発達段階の子どもたちが対象となる。そのため、発達にあった絵本を選ぶためには、当然子どもの発達に関する知識が十分ないと難しいものと考えられる。

読み聞かせに関する技術の中で、自信がないと答えた割合の高い設問としては「読後の余韻を大切にすることができる」「絵本の読み聞かせに適した環境構成を考慮することができる」の2つである。絵本を読んだ後の余韻は、絵本を通して楽しんできた物語の世界を子どもたちが自分なりに解釈をしたり気持ちを切り替えたりするのに必要な時間であり大切にしたいものである。しかし絵本を読み慣れていない学生にとっては絵本を読み終えた後の対応や子どもたちの反応を受け止め適切な対応をとることは難しい技術なのであろう。

また絵本の読み聞かせに適した環境構成については、保育現場で絵本の読み聞かせをする経験が浅いため自信を持ち難いことが予想される。しかし子どもたちが絵本の読み聞かせを十分に楽しむためには、読み聞かせに適した環境を作ることは必須であり、この点については保育者養成校・学外実習などにおいてそうした経験を積む機会をつくる必要があるだろう。

表3. 自信のない絵本に関する知識・技術

質問	選択肢	%	人数
多くの絵本を知っている。	そう思う	5.1%	28
	ややそう思う	23.8%	131
	あまりそう思わない	61.5%	339
	そう思わない	9.6%	53
子どもの発達にあった	そう思う	4.0%	22
	ややそう思う	46.5%	256

絵本を選ぶことができる。	あまりそう思わない	47.3%	260
	そう思わない	2.2%	12
読後の余韻を大切にすることができる。	そう思う	5.8%	32
	ややそう思う	30.9%	170
	あまりそう思わない	58.4%	322
	そう思わない	4.9%	27
絵本の読み聞かせに適した環境構成を考慮することができる。	そう思う	5.6%	31
	ややそう思う	37.4%	206
	あまりそう思わない	52.3%	288
	そう思わない	4.7%	26

このように、保育者志望学生は、絵本に対して肯定的な意識を持ちながらも、絵本の読み聞かせの技術や絵本に関する知識については、必ずしも自信があるというわけではないことが明らかとなった。

## (2) 読書に対する意識

次に、読書に対する意識について確認する。絵本に対する意識がどのように変化するかを明らかにするために、本調査では、幼児期・小学校時代・中学校時代・高校時代・現在(大学在学中)という時期区分ごとに、絵本・本を読むことが好きだったかどうかを質問した。

その結果、幼児期は絵本を読んでもらうこと・自分で読むことのどちらについても「とてもそう思う」を選択した者が最も多かった。ところが、小学校・中学校・高校と進むにつれて本を読むことが好きだったと答える割合は徐々に減少している。そして、大学生になると、本を読むことが好きであると答える割合が若干回復している。

表4. 読書に対する意識

質問	選択肢	%	人数
幼児期に絵本を読んでもらうことが好きだった。	そう思う	56.1%	309
	ややそう思う	31.6%	174
	あまりそう思わない	11.1%	61
	そう思わない	1.3%	7
小学校時代、本を読むことが好きだった。	そう思う	33.6%	185
	ややそう思う	29.3%	161
	あまりそう思わない	26.4%	145
	そう思わない	10.7%	59
中学校時代、本を読むことが好きだった。	そう思う	18.5%	102
	ややそう思う	22.1%	122
	あまりそう思わない	40.9%	226
	そう思わない	18.5%	102

高校時代、本を読むことが好きだった。	そう思う	14.3%	79
	ややそう思う	22.5%	124
	あまりそう思わない	43.1%	238
	そう思わない	20.1%	111
現在、本を読むことが好きだ。	そう思う	21.2%	117
	ややそう思う	31.2%	172
	あまりそう思わない	37.5%	207
	そう思わない	10.1%	56
現在、絵本を読むことが好きだ。	そう思う	49.4%	272
	ややそう思う	40.7%	224
	あまりそう思わない	8.5%	47
	そう思わない	1.5%	8

では、どのような学生が「現在、本を読むことが好き」と答えたのであろうか。相関がみられたのは「(幼少期に)絵本をたくさん読んでもらった」という項目であった。表5は、幼少期の絵本体験と現在の読書への意識の相関を示している。なお、表5から表9については、一部「そう思う」「ややそう思う」を「そう思う」に、「あまりそう思わない」「そう思わない」を「そう思わない」に合算して示す。

表5. 幼少期の絵本体験と現在の読書への意識

		現在、本を読むことが好きである。				
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合計(N)
幼少期に絵本をたくさん読んでもらった	そう思う	22.7	30.7	38.7	8.0	100(450)
	そう思わない	14.9	32.7	32.7	19.8	100(101)
	計	21.2	31.0	37.6	10.2	100(551)

p<.05 (単位：%)

このように、小学校から高校にかけて徐々に読書が好きではない割合が増えていくものの、幼少期に絵本体験をしていることで大学時代に再び本を読むことが好きになる可能性があることがわかる。

### (3) 絵本に関する知識・技能に関する自信

絵本に関連する「自信」はどのように培われているのだろうか。読み聞かせに関する自信の有無を問う質問と相関のある項目を検討すると、読み聞かせに関する自信は「読み聞かせの技術」と「絵本に関する知識」に分けて考える必要があることがわかった。

「読み聞かせの技術」に関する自信があると回答した学生は、「ボランティアやアルバイトで子どもに絵本を読む機会がある(過去にあった)」と回答した学生に多くみられた。

表6. 現在の状況と絵本に関する自信(1)

		ボランティアやアルバイトで子どもに絵本を読む機会がある(過去にあった)	
		該当する	該当しない
読み聞かせの空間・場所に適した声の大きさと読むことができる。	そう思う	82.5	66.2
	そう思わない	17.5	33.8
自然な抑揚をつけて読むことができる。	そう思う	68.5	48.3
	そう思わない	31.5	51.7
子どもたちの反応を見ながら読むことができる。	そう思う	74.6	55.8
	そう思わない	55.8	44.2
絵をしっかりと見せながら読むことができる。	そう思う	86.4	74.0
	そう思わない	13.6	26.0
子どもが見やすいように絵本を持ち、ページをめくることができる。	そう思う	78.6	67.3
	そう思わない	21.4	32.7

p<.05 (単位：%)

一方で、「絵本に関する知識」に自信があると回答した学生は、「現在、絵本を読むことが好きだ」「現在、本を読むことが好きだ」と回答した学生に多くみられた。

表7. 現在の状況と絵本に関する自信(2)

		多くの絵本を知っている。	
		そう思う	そう思わない
現在、絵本を読むことが好きだ。	そう思う	30.4	69.6
	そう思わない	16.4	83.6
現在、本を読むことが好きである。	そう思う	33.0	67.0
	そう思わない	24.4	75.6

p<.05 (単位：%)

つまり、技術面で自信を持つためには、子どもの前で読み聞かせをする経験を積み、知識に関する自信を持つためには本を好きになることが必要である。そのためには、一



人ひとりの学生が、自分の絵本体験や本に対する認識を把握し、足りない部分を意図的に補うことが必要といえよう。

#### (4) 過去の絵本体験と現在の絵本に関する自信

過去の絵本体験が現在の絵本に関する自信の有無にどのように影響しているのかを検討した。

その結果、「(幼少期に) 絵本を自分で読むことが好きだった」「(幼少期に) 好きだった絵本を今でも覚えている」の2項目は「読み聞かせの技術」「絵本に関する知識」のどちらの自信にもつながっていることがわかった。

表8. 過去の絵本体験の影響(1)

		自然な抑揚をつけて読むことができる。		子ども達の反応をみながら読むことができる。		絵をしっかりと見せながら読むことができる。	
		そう思う	そう思わない	そう思う	そう思わない	そう思う	そう思わない
絵本を自分で読むことが好きだった	そう思う	<b>61.4</b>	<b>38.6</b>	68.2	31.8	82.0	18.0
	そう思わない	<b>48.7</b>	<b>51.3</b>	56.3	43.7	75.6	24.4
好きだった絵本を今でも覚えている	そう思う	<b>60.8</b>	<b>39.2</b>	<b>67.7</b>	<b>32.3</b>	<b>82.2</b>	<b>17.8</b>
	そう思わない	<b>50.4</b>	<b>49.6</b>	<b>56.6</b>	<b>43.4</b>	<b>73.5</b>	<b>26.5</b>
		子どもの発達にあった絵本を選ぶことができる。		読後の余韻を大切にすることができる。		絵本の読み聞かせに適した環境構成を考慮することができる。	
		そう思う	そう思わない	そう思う	そう思わない	そう思う	そう思わない
絵本を自分で読むことが好きだった	そう思う	<b>53.6</b>	<b>46.4</b>	38.8	61.2	44.9	55.1
	そう思わない	<b>40.3</b>	<b>59.7</b>	30.3	69.7	36.1	63.9
好きだった絵本を今でも覚えている	そう思う	52.3	47.7	<b>39.8</b>	<b>60.2</b>	<b>45.1</b>	<b>54.9</b>
	そう思わない	44.2	55.8	<b>24.8</b>	<b>75.2</b>	<b>34.5</b>	<b>65.5</b>

\* 相関のある項目を太字で示した。 p<.05 (単位:%)

一方で「多くの絵本を知っている」という項目は「とてもそう思う」(5.1%)「ややそう思う」(23.8%)「あまりそう思わない」(61.5%)「そう思わない」(9.6%)と全体的に「そう思わない」という回答傾向がみられた質問の一つである。

そのような中においても、「家に絵本がたくさんあった」「絵本をたくさん読んでもらった」「絵本を読んでもらう

ことが好きだった」などの幼少期の絵本体験に関する質問に肯定的な回答をした学生は、現在において「多くの絵本を知っている」と回答している割合が高い。

これは幼少期の絵本体験の豊かさ、すなわち、「家に絵本がたくさんあった」や「絵本をたくさん読んでもらった」といった質問からわかる通り、幼少期に絵本を身近に楽しむことでできる環境があったことが影響していることを示している。またそういった環境だったからこそ、「絵本を読んでもらうことが好きだった」「絵本を自分で読むことが好きだった」という絵本に対する肯定的な意識を持つことができたのであろう。

表9. 「多くの絵本を知っている」との相関のある項目

		多くの絵本を知っている。	
		そう思う	そう思わない
家に絵本がたくさんあった	そう思う	33.4	66.6
	そう思わない	8.9	91.1
絵本をたくさん読んでもらった	そう思う	32.1	67.9
	そう思わない	14.9	85.1
絵本を読んでもらうことが好きだった	そう思う	31.0	69.0
	そう思わない	14.7	85.3
絵本を自分で読むことが好きだった	そう思う	33.9	66.1
	そう思わない	11.8	88.2
好きだった絵本を今でも覚えている	そう思う	33.6	66.4
	そう思わない	10.6	89.4

p<.05 (単位:%)

#### (5) 保育者志望学生の心に残る絵本

質問紙の中に「幼少期に読んでもらった記憶のある絵本」(複数回答可)を書く欄を設けたところ、811件の回答が得られた。そのうち4人以上が名前を挙げた35冊(シリーズも含む)の絵本をまとめたものが表10である。

毎年多くの絵本が出版されているが、多くの絵本研究で指摘されている通り、良い絵本は世代を越えて読み継がれていくものである。保育者志望学生が幼少期に読んでもらった記憶のある絵本も学生が将来保育の現場で子どもたちに読み継ぐものと考えられる。

表10に示した35冊の絵本の中で「ミリオンぶっく」の欄に○印のある25冊は「ミリオンぶっく」®に掲載された累計発行部数100万冊を超えている絵本である。2017年度の「ミリオンぶっく」には計104タイトルが挙げられている。また、表9の「ミリオンぶっく」の欄に△印をつけたものは、現在95万部以上発行されている「ミリオンぶっく NEXT」に該当する絵本である。

表10. 保育者志望学生の「幼少期に読んでもらった記憶のある絵本」					
題名	著者	出版社	初版出版年	人数	ミリオンぶっく
ぐりとぐらシリーズ	中川李枝子（作）大村百合子（絵）	福音館書店	1967	68	○
はじめてのおつかい	筒井頼子（作）林 明子（絵）	福音館書店	1977	42	○
はらぺこあおむし	エリック・カール（作・絵） もり ひさし（訳）	偕成社	1976	31	○
わたしのワンピース	西巻芽子	こぐま社	1969	29	○
ノンタンシリーズ	キヨノ サチコ	偕成社	1976	28	○
こんとあき	林 明子	福音館書店	1989	23	○
からすのパンやさん	かこ さとし	偕成社	1973	18	○
ぐるんぱのようちえん	西内ミナミ（作） 堀内誠一（絵）	福音館書店	1966	18	○
バムとケロシリーズ	島田ゆか	文溪堂	1994	17	△
14ひきシリーズ	いわむら かずお	童心社	1983	15	○
いないいないばあ	松谷みよ子（文） 瀬川康男（絵）	童心社	1967	13	○
ティモシーとサラシリーズ	芭蕉みどり	ポプラ社	1989	13	—
こぐまちゃんシリーズ	わかやま けん	こぐま社	1970	14	○
ばばあちゃんシリーズ	さとう わきこ	福音館書店	1987	11	—
おいしいのぼうけん	ふるた たるひ（作） たばた せいいち（作）	童心社	1974	10	○
そらまめくんシリーズ	なかや みわ	福音館書店	1999	10	○
ねずみくんシリーズ	なかえよしを（作） 上野紀子（絵）	ポプラ社	1974	10	○
ぼちぼちいこか	マイク・セイラー（作） ロバート・グロスマン（絵） 今江祥智（訳）	偕成社	1980	10	—
どろんこハリー	ジーン・ジオン（作） マーガレット・プロイ・グレアム（絵） わたなべしげお（訳）	福音館書店	1964	9	○
さんびきのやぎのがらがらどん	ノルウェーの昔話（作） マーシャ・ブラウン（絵） 瀬田貞二（訳）	福音館書店	1965	8	○
まどからのおくりもの	五味太郎（作・絵）	偕成社	1983	8	○
めっきらもつきどおんどん	長谷川摂子（作） ふりやなな（絵）	福音館書店	1990	8	—
おふろだいすき	松岡享子（作） 林 明子（絵）	福音館書店	1982	6	○
きょうはなんのひ？	瀬田貞二（作） 林 明子（絵）	福音館書店	1979	6	—
でこちゃん	つちだ のぶこ	PHP研究所	1999	6	—
くれよんのくろくん	なかや みわ	童心社	2001	5	○
11びきのねこ	馬場のぼる	こぐま社	1967	5	○
ちいさいおうち	バージニア・リー・バートン（作・絵） 石井桃子（訳）	岩波書店	1965	5	○
にじいろのさかな	マーカス・フィスター（作・絵） 谷川俊太郎（訳）	講談社	1995	5	—
100万回生きたねこ	佐野洋子	講談社	1977	4	○
おおきなかぶ	A.トルストイ（再話） 佐藤忠良（絵） 内田莉莎子（訳）	福音館書店	1966	4	○
おばけのてんぷら	せなけいこ	ポプラ社	2005	4	—
シンデレラ	—	—	—	4	—
だるまちゃんてんぐちゃん	加古里子	福音館書店	1967	4	○
てぶくろ	エウゲーニー・M・ラチョフ（絵） 内田莉莎子（訳）	福音館書店	1965	4	○

発行部数が 100 万冊を超えた絵本は、本調査の対象である保育者志望学生がうまれる以前から読み継がれているものが多いことを示している。

実際、ミリオンぶっくに該当しない絵本も含めた表 10 掲載の絵本（出版年の特定のできない 1 冊を除く）全 34 冊の初版の発行年をみると 1960 年代に発行された絵本が 11 冊、1970 年代に発行された絵本が 9 冊を数えており、平均発行年（初版の出版年）は 1978（昭和 53）年である。これらの絵本は、現在でもなお、幼稚園や保育所等の保育・教育施設においても読み継がれている絵本である。

本調査では「記憶に残る絵本」の題名とともに、「その絵本を好きだった理由」についても質問している。「好きだった理由」は大きく次の 3 つに大別することができる。

1. 絵本の絵・内容・登場人物の印象を理由とするもの
2. 大人に読んでもらった記憶を理由とするもの
3. 繰り返し読んでいたことを理由とするもの

1「絵本の絵・内容・登場人物の印象を理由とするもの」に分類される記述としては「ぐりとぐらの大きなホットケーキが魅力的だった」「はらぺこあおむしの鮮やかな色使い」「わくわくする物語が大好きだった」「ねこたちのキャラクターが好きだった」などが挙げられる。それぞれの記述からは幼少期に読んだ絵本の内容をよく覚えていることがわかる。

2「大人に読んでもらった記憶を理由とするもの」に分類される記述としては、「この絵本を小さい頃祖母の膝の上で読んでもらっていて嬉しかったから」「延長保育のときに先生がいつも読んでくれた絵本」「お気に入りの絵本だったからいつも母に読んでもらっていた」など絵本を読んでくれた大人との幸せな思い出になっていることを理由とした意見の多くみられた。

3「繰り返し読んでいたことを理由とするもの」に分類される意見としては、「家にある絵本で幼稚園の頃から何度も読んでいる。今でもたまに見たくなることがある」というように自分で繰り返し読んだという意見もあれば、読み手が誰であったかは書かれていないが「何がいい？と言われたらいつもこの絵本を読んでもらっていたから」というように大人に繰り返し読んでもらっていた記憶を理由とするものもみられた。

また、「冒険の絵本が好きで寝る前によく母に読んでもらった。この絵本の言葉は全て暗唱できました。今でもほぼ覚えています。この絵本を読むと子どもの頃のいろいろなことを思い出します」「このアンケートで子供時代を思い出したら、うちの親はたくさん絵本を読んでくれていたことを思い出しました。図書館に親と一緒にいって「あと何冊かいいよ」と言われて絵本を選ぶのが好きでした」というように絵本経験を振り返ることにより幼少期の記憶を呼び起こすきっかけとなった様子がうかがえる記述もみられた。

松居（1986）は「（前略）幼少期における絵本体験は、（中略）身近で親しい人の心のこもった言葉で語られたものであったらならば、はるかな記憶のかなたから、大人になったとき少しも色あせることなく（中略）年を経るほどにはっきりと心によみがえってくる」<sup>10</sup>と述べている。本調査の自由記述からも、保育者志望学生の幼少期の絵本体験が幸せな記憶とともに残っていることがわかる。

## まとめ

保育者志望学生にとって、絵本は肯定的な存在であり、積極的に学びたい対象となっていることがわかる。また今回の調査を通して、幼少期の絵本体験が現在の絵本の読み聞かせの技術や知識に関する自信の有無に影響していることが明らかとなった。

このように幼少期の絵本体験の影響を受けやすい「絵本」は、保育の現場では欠かせない教材の一つであり、より多くの学生が絵本に親しみ、絵本に関する知識・技能に自信をもって卒業していくことができるように、保育者養成の現場でも配慮していく必要がある。

また、今回の調査では、本を読むことが好きだと感じられる大人を育てるためには幼少期の絵本体験が重要であることもわかった。保育者は、幼少期の子ども達やその保護者と直接かかわり、絵本の楽しさや絵本を通じた親子のかかわりの大切さを伝えることができる立場にいる。養成校では、保育者志望学生に対して、絵本の読み聞かせをするための技術や知識だけでなく、絵本が子ども達に与える影響についてもしっかりと伝えていく必要があるといえるだろう。

---

## 【注および引用・参考文献】

- 1 2001（平成 13）年、法律第 154 号。
- 2 国立青少年教育振興機構「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究」青少年調査ワーキンググループ報告書、2013 年。
- 3 同上の調査では「読書活動」という言葉を用いている。
- 4 安達喜美子「青年期にみられる幼少時期の「昔ばなし」・「絵本」体験の意味について」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）』33, 1984.
- 5 郷木義子・山崎早苗・藤井伊津子「青年期からみた子ども期の絵本体験」『短期大学図書館研究』25, 2006.
- 6 藤井伊津子・山崎早苗・郷木義子「青年期からみた子ども期の絵本体験 2—2003 年と 2008 年を比較して—」『順正短期大学研究紀要』37, 2008.
- 7 脇明子編著『子どもの育ちを支える絵本』岩波書店、2011 年。松井友『わたしの絵本体験』大和書房、1986。村中季衣『絵本の読みあいからみえてくるもの』ぶどう

---

社，2005。河合隼雄・松井直・柳田邦男『絵本の力』岩波書店，2001 等がある。

- <sup>8</sup> 「養成校入学後の学びを通して絵本に対する意識・認識が変化した点」「親と保育者の読み聞かせの相違点」について自由記述に関する分析は他の研究においておこなうため本稿では扱わない。
- <sup>9</sup> 「ミリオンぶっく」とは株式会社トーハンが累計発行部数 100 万冊を超える絵本を冊子「ミリオンぶっく」にまとめたものであり，書店等で配布されている。
- <sup>10</sup> 松井友『わたしの絵本体験』大和書房，1986 年，p10.